慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高卒従業員の帰属意識に関する一考察
Sub Title	
Author	谷川豊(Tanigawa, Yutaka) 石田英夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1985
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1985年度経営学 第416号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001985-0416

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0416

学生氏名　谷川　豊

主査　石田英夫
副査　関本昌秀
　　髙木晴夫

所属ゼミナール　関本昌秀研

高卒従業員の帰属意識に関する一考察

本論文は、高卒従業員を活性化していく方法を考察するために、高卒従業員の帰属意識を研究することを目的としている。そして、関本・花田の帰属意識調査フレームにもとづき、多変量解析の手法を用いて高卒従業員の帰属意識の要因構造を分析・考察し、併せて、関本・花田の実施した大卒従業員の調査結果との比較も行なった。

本研究においては、主に以下のような分析結果が得られた。

1. 本調査で測定している高卒従業員の帰属意識は、大卒従業員と同じく4つの因子で構成されており、当初予想した6つの因子は抽出されなかった。
2. 帰属意識を支える各原因変数については、因子分析の結果10個の因子が抽出され、それは大卒従業員の場合とほぼ同じようなパターンを示していた。
3. 各帰属意識因子を従属変数とし、それを支える原因変数を説明変数として重回帰分析を行なった結果、高卒従業員は、大卒従業員に較べて各帰属意識因子を支える説明因子の構造が単純であるという結果を得た。
4. 各帰属意識因子の得点を基に高卒従業員についてクラスター分析を試みた結果、4つのクラスターが確認された。そして、4つのクラスターの中で《功利型》クラスターの者は全体の1割弱を占めていた。他方、全ての帰属意識因子の得点がマイナスあるいは零に近い値を示している《希薄型》クラスターに属する者は全体の過半数を占め、大卒従業員の場合に較べて非常に高い比率を示した。

他の2つのクラスター、すなわち、《伝統型》と《自己主体型》に属する者が企業に対して積極的な帰属意識を有しているのに較べて、《希薄型》と《功利型》のクラスターに属する者は、消極的な帰属意識しか有していないと考えられる。従って、高卒従業員を活性化するにあたっては、後者の2つの型に属する人々に対する対策が、企業として重要かつ急務な課題であると言えよう。そして、対策を立てるに際しては、重回帰分析の結果に示された帰属意識の要因構造を念頭において検討することが重要と思われる。